



從
西女
地

伊地知文庫
文庫20
238
'2



連歌細目下

連歌提要下 付標口傳

目錄

一 可道之事

二 自他

三 伴骨連歌

四 立句

五 本哥採用

六 三句離

七 從年從集付体

八 花櫻付体

九 詞ノ体用

十 地連哥

十一 景気付

十二 収成ノ句

十三 古事本記付

十四 同意句付

十五 野田付体

十六 正花、吳花結句

十七 無名本草 名草木

十八 時分時分付体

十九 字付所

二十 何ういふ

二十一 猶字付体

二十二 字付体

二十三 字付体

二十四 字付体

二十五 字付体

二十六 字付体

十九 舞名鳥名鳥 付歌

二十 隠題ノ句体

二十一 字付体

二十二 字付体

二十三 字付体

二十四 字付体

二十五 字付体

二十六 字付体

二十七 字付体

二十八 字付体

二十七 女とあつ句

二十八 字付体

二十九 物を付体

三十 付体

三十一 字付体

三十二 字付体

三十三 字付体

三十四 詩ノ対ノ様付体

三十五 文有文事

三十六 詞ノけ合連哥ニ大連哥ノ事

三十七 知ノ付体

三十八 唯ノ字付体

三十九 實と字付体

四十 免くあつ付体

四十一 字付体

四十二 字付体

四十三 名形を付体

四十四 小眼を付体

五十六 秀句并連哥未來記入の凡俗俳諧等
 五十七 難句并碎句の付俣
 五十八 古風体 句の連哥きせてかえり置ておこ
 五十九 連歌病并雜詞之事
 六十 辨意部難法而於則

以上

伊地知氏書冊

一 四道之事

此一首中二義五体八十体等、外種の内身より
 一、專断と云ふ四道也四道といふ流從難逆
 也分枝の根原とも道と薄切部廿一と云

添一しーをぬく神そあはま

里にあまそ記のこ徳自り給

萱、事案のあり明入り月

従
しーをぬく神そあはま

目録志あり、ふあまそあは

一、の産し給ふ高屋



離

時のふるふをさきし西の空
きりこまきのまろ物風

さきの海にちる奥山

二度そつちまうわんやん

道——こまひの秋の野た

とこわりのちか小結なん

右道と家して連絡をうらまへて花め夜

河とさし

詞体用之事

六と集の体用とこひ候合

類ハ体 ちろハ用

産体 かにハ用

思ハ体 ちろハ用

他ハも小准してちろハ用ハ糖ハちろハ用ハ

いハ大ハ准して産体ハちろハ用ハ

いハ大ハ准して産体ハちろハ用ハ

てもわんをちろハ用ハ漢思ハちろハ用ハ

ちろハ用ハ糖ハちろハ用ハ但ちろハ用ハ

ちろハ用ハ糖ハちろハ用ハ但ちろハ用ハ

詞の体用とちろハ用ハ

こゝろもなほなほあはれおぼしき心なほ
りたおぼしき他おぼしき心
又あはれなほと心もなほとあは

いさうそおぼしき心
又あはれなほと心もなほとあは

又心もなほと心もなほとあは

心もなほと心もなほとあは

あはれなほと心もなほとあは
心もなほと心もなほとあは

心もなほと心もなほとあは
心もなほと心もなほとあは

心もなほと心もなほとあは

心もなほと心もなほとあは
心もなほと心もなほとあは

心もなほと心もなほとあは

詩：旅館無き春雨魂亦西出陽關幾人幾人

とよみ抄の此境に入らばは律をなすま
しむ

又一向の中より地を造る連歌有

凡ては志を新しき人
旅情をこの方とせん

この歌は方よりして抄に詞歌をい
ふは(Season)を地を造る一は
旅情をこの方とせん又
旅情をこの方とせん又
旅情をこの方とせん又
旅情をこの方とせん又
旅情をこの方とせん又
旅情をこの方とせん又
旅情をこの方とせん又

この歌は方よりして抄に詞歌をい
ふは(Season)を地を造る一は
旅情をこの方とせん

又一向の地を造る一は

又一向の地を造る一は

旅情をこの方とせん又
旅情をこの方とせん又

旅情をこの方とせん又

旅情をこの方とせん又
旅情をこの方とせん又

旅情をこの方とせん又

二三の字を讀みし人の心も亦して一に定むる
程に一日の間に於てお尋ねの事ありては
前出の事より申すべし

前出の事能はしむるに於てお尋ねの事
洗筆二漏筆之目此口傳連歌ノ音類ノ事
は人の行果し

連歌ノ心

此は歌ノ心ノ事也其ノ心ノ事ノ事
は人の心ノ事也

心ノ事ノ事ノ事

心ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
心ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事
心ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

左の垣根

左の垣根

右の垣根
左の垣根

御京の事

御京の事

御京の事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事

句痛し

右地連奇と能く心からしむる可き御書の色
をまゝ又二重なる御格の体物しむる
又御書の色に御書の色に御書の色に御書の色
に御書の色に御書の色に御書の色に御書の色
に御書の色に御書の色に御書の色に御書の色

御書色連歌

御書色連歌

御書色連歌
御書色連歌

御書色連歌
御書色連歌

御書色連歌

御書色連歌

御書色連歌
御書色連歌

御書色連歌

御書色連歌

夢のこぼれおぼろけのまぼろしをよみてはたはたのこぼれ
こぼれおぼろけ

おぼろけのこぼれおぼろけのこぼれおぼろけのこぼれ
おぼろけのこぼれおぼろけのこぼれおぼろけのこぼれ
おぼろけのこぼれおぼろけのこぼれおぼろけのこぼれ
おぼろけのこぼれおぼろけのこぼれおぼろけのこぼれ
おぼろけのこぼれおぼろけのこぼれおぼろけのこぼれ

又一本の巻くしをわらわらとくもはなれり

あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
河国の梢と名はれり

あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
口はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは

あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは

あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは
あつたまはあつたまはあつたまはあつたまはあつたまは

香くもあけし
はくもあけし

旅の侍 日たつきの旅の侍
あき野余の侍

あけし
しんしの旅

舟の侍 舟の侍
舟の侍 舟の侍

又あけし

旅の侍

舟の侍

旅の侍 舟の侍
舟の侍 舟の侍
舟の侍 舟の侍
舟の侍 舟の侍
舟の侍 舟の侍

旅の侍

舟の侍
舟の侍

お慶り入江の浪のうき
大島・島崎しきしき浪のうき
風体小舟のうき
又理とくまのうき
飛のうき
月海の指端の音のうき
この旗をたてて
舟のうき
大島島のうき
七
之うき

このうき
このうき
このうき
このうき
このうき

あまのうき
別れのうき
用表し海軍のうき
舟のうき
又うき

きんぎょのついでに

右のついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに

きんぎょのついでに

きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに

きんぎょのついでに

きんぎょのついでに

きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに

きんぎょのついでに

きんぎょのついでに

きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに

きんぎょのついでに

きんぎょのついでに

きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに
きんぎょのついでに

しはらむ〜人かたふ〜一〜十の心〜心〜心〜心
〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心
又あつ〜人の事〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心
〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

結〜人〜心〜心〜心〜心〜心

月〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

右人の心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

の心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

又心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心

色——しんまふきん

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

あつぬまふきん 朽れゆき

夜〜の書〜の書〜の書〜

おのふ梅ふらふら〜の書〜の書〜の書〜

梅子もゆ〜の書〜の書〜の書〜

あ〜ゆ〜

又あふ〜の書〜の書〜の書〜

う〜梅〜の書〜の書〜

ふ〜梅〜の書〜の書〜

ふ〜梅〜の書〜の書〜の書〜

ふ〜梅〜の書〜の書〜の書〜

は〜梅〜の書〜の書〜

あ〜梅〜の書〜の書〜

あ〜梅〜の書〜の書〜の書〜

あ〜梅〜の書〜の書〜の書〜

あ〜梅〜の書〜の書〜

あ〜梅〜の書〜の書〜

あ〜梅〜の書〜の書〜の書〜

あ〜梅〜の書〜の書〜の書〜

あ〜梅〜の書〜の書〜

若乃の産とよひの好いも
仕^仕子もさし——天の侍の侍
そえどいほの鷹場をたて
あつてそいかにあつたを
梅のうらみの夜明けの月
待つるよりのいまもまに
とらぬのころの昔はついで
そよひの秋の勝斗 結納はと——
九
本歌と取違ぬと

祇衣中歌と採ふもさうのも昔又詞とあつて
源ふして人をいかにさるものもゆかりの音もあつて
をたそよのけ——いささか——
は傳ふも中歌とあつていささかいささかのつて
その月と歌と——又あつた中歌の詞もよつて
村のうらむもいささかいささか——又人の音もあつて
秋のうらむもいささかいささか——

一 中歌のうらむもいささかいささか——
そよひの秋と

奇と交合する白くやえし和歌の流分は事本とし

いし舟の空そ昔の流あり

白帆のまのふら船端し

似そこの操のまのふら船端し

あしやもまのふら船端し

のふら船端しと舟のまのふら船端し

二舟歌の詞の流しを記して舟の体

あまのふら船端し

あまのふら船端し

舟を記して舟のまのふら船端し

あまのふら船端し

あまのふら船端し

あまのふら船端し

舟を記して舟のまのふら船端し

あまのふら船端し

あまのふら船端し

あまのふら船端し

あつしめ月あつしめ

うし輝あつしめし結あつて

うし輝の羽あつしめあの本隠して

言あつしめしあつしめ神あつ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめしあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

あつしめあつしめあつしめあつしめ

鳥の鳴き声はさうさうのこゝろ

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あ

母家よりお返事

お返事お返し

秋は紅葉のころ

お返事お返し

お返事お返し

お返事お返し

お返事お返し

お返事お返し

秋は紅葉のころ

お返事お返し

お返事お返し

お返事お返し

お返事お返し

お返事お返し

お返事お返し

お返事お返し

お返事お返し

〜〜〜の公の歌

くの人形〜Oscarの歌

信濃の海〜〜〜

何れもこの庭の人もも生國よももちの歌

木葉つら〜〜

の〜〜〜

屋敷の歌〜〜

大〜〜〜

の〜〜〜

大〜〜〜

六中歌二首〜〜

〜〜〜

津垣も〜〜

十甲梅の〜〜

ら〜〜

七 中歌小〜〜

中歌の詞〜〜

秋風〜〜

いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし

いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし
いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし
いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし
いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし

いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし

いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし

いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし

いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし
いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし
いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし
いっしの音も偽らぬ。
入社の境やまらぬおぼやかし

今めし兼立しるの体

捨つる身とてしる事しる事

死なざる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

けりてしる事とてしる事しる事

十 古事本流連歌之文

古事本流の事とてしる事しる事

の事とてしる事しる事しる事

の事とてしる事しる事しる事

むら松の風の音

胸さうらひ花の夜を

丁公十八公の事を知る事なきや松の夜
さうらひ花の夜をよめるは呉録生其腹上
とあり物の子をよめる

あふらんをいふ事

いふ事なきは

論語子曰天何言哉四時行焉百物生焉
とふん

詩をうそ作せ康士の人

いへ根を連う松の辛ひて

曹植七字の事

いふ言を去るぬ事

夜出づゆいづ眠る事

古詩馬上續殘菊不名朝日昇の事

さけしきん鹿ハ物

やまのけしき世の政

苛政猛於虎

三三の歌は中流のまをり来りの傳く
又中流を成りぬるの傳き

あはれなるの國の人
と虎の狩りやと

と奇政のよりのなれは身は虎狩り奇
政のよりのなれは身は虎狩り奇
流のよりのなれは身は虎狩り奇

あはれなるの國の人
と虎の狩りやと

と奇政のよりのなれは身は虎狩り奇
政のよりのなれは身は虎狩り奇
流のよりのなれは身は虎狩り奇

あはれなるの國の人
と虎の狩りやと

と奇政のよりのなれは身は虎狩り奇
政のよりのなれは身は虎狩り奇
流のよりのなれは身は虎狩り奇

あはれなるの國の人
と虎の狩りやと

おーたふのまののの藤枕

巫山神女羽衣暮雨事なり我旅のしるあ
たふまふのけしき王のまのけをこいせり

月夜一訪いませいあまの

野々の後のをまの秋の末

祇去是の節音訪い借り飯の常月と詩の詞と

あそびの詩をふいおまの訪いふまの

あそびの訪いふてけつとまのしるあ

あそびの訪いふてけつとまのしるあ

小夜又の訪いふてけつとまのしるあ

や洞の訪いふてけつとまのしるあ

探しあまのあまの

細の目とあまのあまの

こいふ体へのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの

ふらふらと木更へて一歩を踏み
おろすも、いさよふたふた
車をこく、く、と
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ

こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ

こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ

こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ
こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ、こゝろへ

必難爲の白あつ難のぞいふ事

車の大ふふふふふふふ

くはらふはらふはらふ

ふたふふふふふの車の大難爲のふふふの
ふふふのふふふのふふふふふふふふふふ
物とたふふ車とふふ車ふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

くはらふはらふはらふ

上二天の園のねふふふふ 初

ふふふふふふのふふふふふふふふふふ
以ふふふふふふふふふふふふふふ
ハ権國或ふふのふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
権國ふふふふふふふふふふふ

車もふふふふふふふふ

はらふはらふはらふはらふ 根

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

少〜少〜少〜
中軍少〜
少〜
少〜
少〜
少〜
少〜
少〜
少〜

漢上事二句法其後Dan

少〜少〜少〜
少〜
少〜
少〜
少〜
少〜
少〜
少〜
少〜
少〜
少〜

少〜
少〜

少〜
少〜
少〜
少〜

少〜
少〜

少〜
少〜
少〜

秋風と掃衣久まのあふれもあつとえんは
多きくはれはかたきくはつたあふれ

秋とあふれ 袖のあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ
あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

あふれくはれはかたきくはつたあふれ

とて痛いと云ふ及乎此は神也併其まお計こ
ふれは佛流中も若し能轉物則同如來と云ふ
そん悟して痛いと雖もく

十二
三州の同意事なき如牙

解を

人ううう待てい

方の事(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

維きう一なる事(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

ふまう(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

ゆのう(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

おきり(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

おきり(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

くお(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

この(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

准く

祇云(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

一(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

を(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12)

海一く舟のけしきく

まゆね界記きぬ年しり行こす

又新一まむらじ

おのろくは投じ絶れぬ

三月六日

舟中

新一まむらじのきぬ年しり行こす

まゆね界記きぬ年しり行こす

かきく地確

あまのりんりん

あまのりんりん

あまのりんりん

あまのりんりん

あまのりんりん

あまのりんりん

あまのりんりん

あまのりんりん

あまのりんりん

こゝの考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

こゝの考のふしはあつたかゝるものなり

又二説を考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

こゝの考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

考のふしはあつたかゝるものなり

いふはかたしは 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

こまに藤のあゆみ 藤のあゆみ 藤のあゆみ
藤のあゆみ 藤のあゆみ 藤のあゆみ
藤のあゆみ 藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

藤のあゆみ 藤のあゆみ

伊心し

又二説之記其の神々の成長成らざる所の
を記ししもの記述あるに父の神と母の神と
の別なきことを述べてはくは、*Daughters of
Heaven* を先しけり也

Qimotepe 記
Qimotepe 記
~~~~~  
*Qimotepe* 記  
~~~~~  
Qimotepe 記

けり也。世に傳へしもの中、自注に於て、*Qimotepe*
~~~~~  
*Qimotepe* 記  
~~~~~  
Qimotepe 記

又其の記述を正しむるに、*Qimotepe* 記
~~~~~  
*Qimotepe* 記

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

橋をふるまの如く又は乳小准しては口の如く
白小橋朝とて又橋をぬの油橋へしては
との中植わらぬ橋は物の子如くは
又二種をふるまの正乳の橋へあはぬ
解を

ほらゝの如くは

中い方の本乳射のふあしては
まらん乳の着と射ひかて

中い方の乳玉浄土のふあはぬ射ひかて

橋をふるまの如くは
中い方の本乳射のふあしては
まらん乳の着と射ひかて
中い方の乳玉浄土のふあはぬ射ひかて
右さつたの乳射
橋をふるまの如くは

阿彌陀佛 蓮華 節 田 宛 橋 是 と 二 葉 結 橋
とて也

又橋をふるまの如くは
橋をふるまの如くは

年夜

しーの別紙中においふことゝの如

評正草

途にさくく折らるる如

力まの如の如く行ある

又絶世徳の伴

しーの如く橋よりさくく

後一をさくく此の如く

自任がまゝの如く

しーの如くしーの如くしーの如く

け体は立ておゝいゝの如くしーの如くしーの如く

可希

正死が如くしーの如くしーの如く

しーの如くしーの如くしーの如く

しーの如くしーの如く

しーの如くしーの如く

又み字の如くしーの如くしーの如く

梅の如くしーの如く

如くしーの如く

わが心は花の如く
こころ

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

毎時

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

花の如くは心は花の如く

暁の光のさすところあり
みねの静けさ、静けさ

あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり

さくらに似る白のゆめ
梅の影うつらうつら
あけの光のさすところあり

月夜に似る白のゆめ
あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり

あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり
あけの光のさすところあり

あけの光のさすところあり

市原の夢のあつたとき

つらさのあつたとき

程の又あつたとき

あつたとき

己利十の
去年のつらさのあつたとき

けり月住のつらさのあつたとき

己利十の
あつたとき

あつたとき

あつたとき

壁
あつたとき

あつたとき

あつたとき

あつたとき

あつたとき

あつたとき

あつたとき

一格

格

あつたとき

三ノ目ノ...
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

子規のこゝろをいかにかきとらふ

あふれぬかたのこゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ

こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ

こゝろをいかにかきとらふ

初日とては、うららかなる

こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ

こゝろをいかにかきとらふ

こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ
こゝろをいかにかきとらふ

こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、

こゝに於ては、
こゝに於ては、

こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、

こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、

こゝに於ては、
こゝに於ては、

こゝに於ては、
こゝに於ては、

こゝに於ては、
こゝに於ては、

こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、

こゝに於ては、
こゝに於ては、

こゝに於ては、
こゝに於ては、

こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、
こゝに於ては、

秋のうらみ〜

右様の夕に霞の〜

〜

余は〜

時合小町合とや侍

引分

草花の〜

〜

初逢き〜

夕のま〜

あ〜

〜

夕の雨の〜

〜

〜

〜

〜

〜

そつと俤をいふ

二十 隠顔の句俤

祇云八十神之内 隠顔俤

美の中のはりし親子のあはれ

一かしのうらあはれあはれ

あはれいふけしにあはれあはれいふけしに

あはれいふけしに

又けあはれいふけ俤あり

江ノ浦に

あはれいふけしに

右の句俤あはれいふけしに

あはれいふけしに

はれいふけしに

いふけしに

あはれいふけしに

あはれいふけしに

あはれいふけしに

實 / 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

あゝ有るはと終るはと行の書はと行は
かゝるはと行はと行はと行はと行は

ひてと行はと行はと行は

あつと行はと行はと行は

念珠と行は

一行と行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

あゝと行はと行はと行は

三三 引 糸 糸 糸 糸 糸 糸

作 傷

乃 乃 乃 乃 乃 乃
朽 朽 朽 朽 朽 朽
お ち ち ち ち ち
の の の の の の
ち ち ち ち ち ち
と と と と と と

又 又 又 又 又 又

夜 夜 夜 夜 夜 夜
日 日 日 日 日 日
月 月 月 月 月 月
日 日 日 日 日 日

糸 糸 糸 糸 糸 糸

月 月 月 月 月 月
日 日 日 日 日 日
糸 糸 糸 糸 糸 糸
日 日 日 日 日 日

又東城のついでに

物とて事の中とらん
一處とて事の中とらん

何并つれつら等々

伊集

何

中ふ雲の何とらん
深しとて事の中とらん
免滅社のあはれつら
聖所、松の宮は又も

長秋の紅いつれとらん

つれ
つらつらつらつら

つらつらつらつら

二道とて事の中とらん

つらつらつらつら

つらつらつらつら

つらつらつらつら

つらつらつらつら

つらつらつらつら

都京にいつくの昔は對せん
いふもふも世にたつこい
あはれいふにうらみもあはれ
同様にいふにうらみのま
あはれいふも世にたつこい
あはれいふにうらみもあはれ
あはれいふにうらみもあはれ
あはれいふにうらみもあはれ
あはれいふにうらみもあはれ

ト云ふ可もけ敷の風情あり

あはれいふにうらみもあはれ
あはれいふにうらみもあはれ
あはれいふにうらみもあはれ
あはれいふにうらみもあはれ

又醫のいふこととていふこと
又醫のいふこととていふこと

やう律もあはれいふにうらみもあはれ

猶、字、か、律

あはれいふにうらみもあはれ
あはれいふにうらみもあはれ
あはれいふにうらみもあはれ
あはれいふにうらみもあはれ

さし伝説も今なき事
山崎の松も秋の白紙
ゆき雪の舞う海は死んで

海の名も松の影もやうせん
門田のふりかざりたる
海の名も松の影もやうせん
松の影も松の影もやうせん

あゝ漢のふりかざりたる

ゆき雪の舞う海は死んで
ゆき雪の舞う海は死んで
ゆき雪の舞う海は死んで
ゆき雪の舞う海は死んで

さし伝説も今なき事
山崎の松も秋の白紙
ゆき雪の舞う海は死んで

ゆき雪の舞う海は死んで

さし伝説も今なき事
山崎の松も秋の白紙
ゆき雪の舞う海は死んで

ゆき雪の舞う海は死んで
ゆき雪の舞う海は死んで
ゆき雪の舞う海は死んで
ゆき雪の舞う海は死んで

この本は段の事にして

この本は段の事にして
この本は段の事にして
この本は段の事にして
この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

この本は段の事にして

可しの命に...
心は...
し...
を...

活体

活体

ハノ字ハヤク侍

お侍云ハノ字ハ...

波の...

別して...
人...
...
...
...

付録ハ...

又...

...

...

いふはさしづか 詠の好いて
世はふらふら 舟の舟は川
こもりの字をてあひわたりて 詠の体し
詠 はこ 字の体

作例

詠の好いて 詠の好いて
舟の舟は川 舟の舟は川
詠の体し 詠の体し
里の名とて 詠の好いて

いふはさしづか 詠の好いて
二道にさしづか 詠の好いて
詠の体し 詠の体し
詠の好いて 詠の好いて
詠の好いて 詠の好いて
詠の好いて 詠の好いて

詠の好いて 詠の好いて
詠の好いて 詠の好いて
詠の好いて 詠の好いて
詠の好いて 詠の好いて
詠の好いて 詠の好いて
詠の好いて 詠の好いて

五ノくニ
三ノ

有るなり

五ノくニ字ニ
字ニ無の伴し
風も亦も
いふ言の
事も
風も
事も
事も
事も

志は

事も
又

他
珠

三ノ
字

古抄云
押
宣

家木ののらういあを枯ぬ。

晨明の入りの松のついで

こぼれゆく信長村の香深き道に 但馬の

まね松のついであたまのついで

ふまひらひらけし影をたもと

こぼれゆく信長の居る口の内へ

こぼれゆく信長の香深き道に 但馬の

まね松のついであたまのついで

ふまひらひらけし影をたもと

漸おくゆらぐ信長の居る

こぼれゆく信長の香深き道に

ふまひらひらけし影をたもと

松のついであたまのついで

ふまひらひらけし影をたもと

佛の先づかへしや誰

こぼれゆく信長の香深き道に

まね松のついであたまのついで

ふまひらひらけし影をたもと

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

けねにあつては國布の字を採(る)

又いふに國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

こゝにあつては國布の字を採(る)

ふつふつと秋のふゆ白紙
こまにあつて雛唄のこころ
しなやかなるをきくこころ
あはれもすこし遠くおぼしむ

こころあつておぼしむ唄し
又のこころあつて唄を
くこころあつて唄を
ちんぷらと唄をきく

廿二
くこころあつて唄を

唄例

ふれふれと白紙のふゆ白紙
雛唄はやきく唄をきく
雛唄あつて唄をきく
初まよと唄をきく
ふきくし唄をきく
く唄をきく

廿二
のこころあつて唄を

この年の春から秋にかけては、昔ほどは、
いづれに、
いづれに

春のさかすかに、

いづれに、

春のあけのぼし、

春のあけのぼし、

いづれに、

いづれに、

のこり、

いづれに、

いづれに、

いづれに、

いづれに、

いづれに、

いづれに、

いづれに、

いづれに、

いづれに、

を病むいふ母の事かきかへて

けんかくの福いふ事

詞いふのあはれいふ事

身城いふ花去母をの事

神垣いふみいふ事

里いふ花きいふ事

けんかくの福いふ事

又読んうらやと巻廿七記

藍
程の字を存侍

程の字を存侍と云ふ事

と云ふ事存侍と云ふ事

と云ふ事存侍と云ふ事

程の字を存侍と云ふ事

あつちんちんちんちん

程の字を存侍と云ふ事

と云ふ事存侍と云ふ事

と云ふ事存侍と云ふ事

世
小文字の書に於ける体

高の小文字の書に於ける体

凡や橋路の書に於ける

凡や橋路の書に於ける

祇云高の小文字の書に於ける

句の書に於ける

凡や橋路の書に於ける

凡や橋路の書に於ける

凡や橋路の書に於ける

同並ぬと只読者へ佳かて

凡や橋路の書に於ける

小文字の書に於ける

相傳ゆかて

奈句に神と上巻雜傳不來記

凡や橋路の書に於ける

高の書に於ける

凡や橋路の書に於ける

裁生に於ける

是六柱の... 是の字... 出...
一... 字... 自...
字... 一... あり

つらひして、抱き...
二... あり

ふ... あり
も... あり

この権... あり
子... あり

お... あり

... あり
... あり

八

下... あり

宝... あり

... あり

... あり

... あり
... あり
... あり
... あり

及多しとて 後のことなり

政理に事小 名譽共して

長

先づくこと 其の一字

二箇の十箇の ことなり

毎くこと 秋のふと

落のやいふ 清きまを

又ノ字ニ年ノ体

作
係

正九

みこい立旅の遊一と

所一も人一ま一ぬ一友一

又子親一も一ふ一ま一こ一し

常一の一ま一ふ一事一の一事一

又一ゆ一し一ま一ま一と一ま一ん

し一二一日一か一い一ふ一ふ一ま一ま一し

み一も一清一け一り一と一ぬ一と一

又一お一の一及一い一ま一ゆ一お一一一ゆ一て

き一ら一お一は一し一と一い一ま一ゆ一と一

あ一ら一い一ま一ゆ一と一い一ま一ゆ一と一

引ひつゝ又ノ字を千の指もある

158の引ひつゝの字

つゝの字は又毎小の風

四十

引ノ字、千の指

只ノ字引心ある、千の指を二指の字を
の千指

毎指の字、千の指

引ノ字、千の指

又ノ字、千指

引ノ字、千の指

人毎の字、千の指

引ノ字、千の指

引ノ字、千の指

引ノ字、千の指

引ノ字、千の指

引ノ字、千の指

引ノ字、千の指

引ノ字、千の指

甲一
物と二行の俵

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と
物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

物と二行の俵と物と二行の俵と物と二行の俵と

何處よりかきし

らぬとていとぞたはしの

ゆのあきしむとぞたはしの

甲十二

いふとていとぞたはしの

或所よりかきし

あきしむとぞたはしの

いふとていとぞたはしの

らぬとていとぞたはしの

ゆのあきしむとぞたはしの

いふとていとぞたはしの

このころの遊者かきし

いふとていとぞたはしの

甲十三

いふとていとぞたはしの

何處

らぬとていとぞたはしの

ゆのあきしむとぞたはしの

いふとていとぞたはしの

らぬとていとぞたはしの

寛作因之...
...
...
...

めけ...
...
...
...

甲四

...
...
...

...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...

星五

...
...
...

...
...
...

...
...
...
...
...
...
...

のり〜〜〜のり〜〜〜

毎夜このころ娘は「父は昔の人の心で
引るらう」といふ程のさしはしめりをする

四十六

四ノ字に作る

ひ〜〜の程の事しよ巻は八記

ち〜〜の園よりおもしろ

子親をよめるは〜〜〜

祇園はひ〜〜の程の事しよ巻は八記

ひ〜〜の程の事しよ巻は八記

ひ〜〜の程の事しよ巻は八記

ひ〜〜の程の事しよ巻は八記

祇園はひ〜〜の程の事しよ巻は八記

ひ〜〜の程の事しよ巻は八記

ひ〜〜の程の事しよ巻は八記

ひ〜〜の程の事しよ巻は八記

ひ〜〜の程の事しよ巻は八記

ひ〜〜の程の事しよ巻は八記

ひ〜〜の程の事しよ巻は八記

同くやふふの侍

同くや。あつたにさあつたのりよと侍

あまのりゆかど今同くや

あつたよとあつたよと侍

又あつたよと侍

あつたよと侍

あつたよと侍

甲六

同くやふふの侍

侍

はあの手をとちゆと侍

あつたよと侍

又あつたよと侍

あつたよと侍

あつたよと侍

甲九

あつたよと侍

あつたよと侍

あつたよと侍

あつたよと侍

石のくさばぬ夕まゝ一沓をこふ耳をうらな
ふは出づり林路く破体くしく様あ

免つしとんとの一筆

明もまゝ書と読書のの如くは

ふしく未のをきし成り御

志くしと書との国くを執て

しるん(空の)かみ(天の)

舟漕ふん(舟の)あつ

はのしと(はの)か(か)あ(あ)の(の)ん(ん)

山城の水をくましく書く

あそくそああ(あ)あ(あ)あ(あ)

ふのあ(ふ)あ(あ)あ(あ)あ(あ)

月(つき)あ(あ)あ(あ)あ(あ)

雲(くも)あ(あ)あ(あ)あ(あ)

祇云(祇)南(南)字(字)初(初)名(名)を(を)多(多)く(く)書(書)く(く) 尚(尚)よ(よ)り(り)能(能)

何(何)も(も)好(好)く(く)行(行)ふ(ふ)こ(こ)の(の)好(好)い(い)こ(こ)の(の)好(好)れ(れ)も(も)事(事)と

廣(廣)く(く)学(学)ぶ(ぶ)こ(こ)の(の)好(好)い(い)こ(こ)の(の)好(好)れ(れ)も(も)事(事)と

何(何)と(と)も(も)好(好)く(く)行(行)ふ(ふ)こ(こ)の(の)好(好)い(い)こ(こ)の(の)好(好)れ(れ)も(も)事(事)と

昔のしるしに「*Barthelemy de Meung*」の
名を載せしむる所は「*Barthelemy de Meung*」の
ことなり。此の「*Barthelemy de Meung*」の
こと知らるるは「*Barthelemy de Meung*」の
又知らるるは「*Barthelemy de Meung*」の
付して居る。

五十一

詩、對句ノ様ニ付俚

詩、心なるをあらはせしむるは「*Barthelemy de Meung*」の
和雜遣、俚於「*Barthelemy de Meung*」の詩、字數格、

花もさかすめはさかすめはさかすめ

さかすめはさかすめはさかすめ

さかすめはさかすめはさかすめ

さかすめはさかすめはさかすめ

さかすめはさかすめはさかすめ

さかすめはさかすめはさかすめ

さかすめはさかすめはさかすめ

さかすめはさかすめはさかすめ

さかすめはさかすめはさかすめ

人かまへんかかかかかかか
かかかかかかかかかかかか
かかかかかかかかかかかか
かかかかかかかかかかかか

五十二

高合と控方の侍

かかかかかかかかかかかか

かかかかかかかかかかかか

旅人を別ぬたのちえ出で

祇言ちと控もあれまけ大の幸ある大か
かかかかかかかかかかかか

又かかかかかかかかかかかか

形かかかかかかかかかかかか

舟かかかかかかかかかかかか

控かかかかかかかかかかかか

舟かかかかかかかかかかかか

夜かかかかかかかかかかかか

舟かかかかかかかかかかかか

五十三

無文有文之事

河州抄、有文有文連編

ふらの昔ふくの月とるそ

けりなふの昔ふくの月とるそ

けりなふの昔ふくの月とるそ

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

有文し

何ふんをうらつてしむる
申とあぬ流路の備わぬの
ありあつた流路の備わぬの

福原まうしつと申すあぬ流路の備わぬの
ありあつた流路の備わぬの
つと申すあぬ流路の備わぬの
流路の備わぬの
ありあつた流路の備わぬの
福原まうしつと申すあぬ流路の備わぬの

何ふんをうらつてしむる
申とあぬ流路の備わぬの
ありあつた流路の備わぬの
つと申すあぬ流路の備わぬの
流路の備わぬの
ありあつた流路の備わぬの
福原まうしつと申すあぬ流路の備わぬの

五十四
小眼と千の神

とせらるしむらさき白小眼とをり侍

ふくれしき来ふそなたれ
ねあはれ新柳の梅咲く

けさの雪の跡は消しつゝもよりの雪は消さぬをうらみ
しては大概の身はれも小眼があるよあはれは嬉しき
よきあはれはあはれあはれ又よきあはれは新柳の梅
よきあはれの雪合はつゝもよりの雪は消さぬをうらみ

ふくれしき来ふそなたれ

ねあはれ新柳の梅咲く

こよもまはれはのあはれと接しつゝもよりの雪は消さぬをうらみ
よきあはれはあはれあはれ又よきあはれは新柳の梅
よきあはれの雪合はつゝもよりの雪は消さぬをうらみ

ふくれしき来ふそなたれ

五十五

詞け合ぬ連歌 言大小連歌

祇衣けのむらさき白小眼とをり侍
ふくれしき来ふそなたれ
ねあはれ新柳の梅咲く

56く九合く九

あつあつ秋の美人書きて

月御き草の枕小長きて

武士を足れば若く着大弓にて

名こもつ顔のふ殿のあて

あつあつとて言はしむる雨

あつあつとて言はしむる雨 堀江克博クニヒロの

岸小舟とて言はしむる雨 秋の夜

と志ししとて言はしむる雨 秋の夜

あつあつとて言はしむる雨 秋の夜

あつあつとて言はしむる雨 秋の夜

あつあつとて言はしむる雨 秋の夜

あつあつとて言はしむる雨 秋の夜

あつあつとて言はしむる雨 秋の夜

あつあつとて言はしむる雨 秋の夜

あつあつとて言はしむる雨 秋の夜

あつあつとて言はしむる雨 秋の夜

毎歳

あつあつとて言はしむる雨 秋の夜

京都府の反割村（海舟）の詞小強弱大小信（一）
能く見てもかゝるものには同じの強弱があらう
こゝろの強弱があらうもの強弱があらう
あゝゝゝゝゝに清なる在るもの強弱があらう
考へたるもの（一）

三吉村の奇の強弱があらうもの強弱があらう
かゝるもの強弱があらうもの強弱があらう
の強弱があらうもの強弱があらう
強弱があらうもの強弱があらう

おもしろい

本士の強弱があらうもの強弱があらう
あゝゝゝゝゝの強弱があらう

は、奇の強弱があらうもの強弱があらう
まゝゝゝゝゝの強弱があらう

新本
強弱があらうもの強弱があらう
強弱があらうもの強弱があらう

東野別去けこの強弱があらうもの強弱があらう
強弱があらうもの強弱があらう
ねの強弱があらうもの強弱があらう
たゝゝゝゝゝの強弱があらう

大正歌こゝろすまゝ家老を大かゝりたるあつゝふがもれ
たてしりゝ小ぶらふとるれが舞ををぬく長いらん
あふふらふゝがたふらふらふ強が伴ふといふ
しー 田舎の物置のまじりのふらふらふといふ

踏あふらふらふ。まあらあつち

とてしりゝ大正歌 あつちの伴が伴つゝあつちと
さゝらふらふらふらふらふら

く幸の陣馬あつちらふ

しりゝらけ合歌 さつちの伴をぬく 田舎記

又さつちあつちらふとさつちあつちさつちのまじり
しりゝらけ合歌 さつちの伴

さつちのまじりあつちの子

大正のまじり合歌

さつちのまじりあつちの子

さつちのまじりあつちの子

又大まじりあつちの子

さつちのまじりあつちの子

おゝ奥のまじりあつちの子

くはに候そはありしなり
後の年をわし人なりを帰して

五十六

おの

并連歌未記

入なり

凡依能譜

敬き、かたきありとふも、この表に、うらも、返り、ま、あ、
く、秀の、名、号、を、教、し、ま、は、け、た、後、の、ま、あ、り、ま、あ、り、と、い、え
は、ら、む、と、あ、ら、む、は、な、し、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、と、い、え、
偏、し、好、し、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、

つ、く、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、
は、な、し、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、

入、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、
ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、

その名号記し、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、

し、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、
ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、

凡、秀、の、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、
ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、
ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、

入、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、ま、あ、り、

浪ひし事未記小箱約りしは人の事未記二二
河の事未記し人の事未記し

久あさいせいのちん

二月の事未記の船中事未記し

佛がまじりし事未記し人の事未記し何れ會
の事未記し人の事未記し人の事未記し人の事未記し
人の事未記し人の事未記し人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

人の事未記し人の事未記し

まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く

まゝの如く

まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く

まゝの如く

まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く

まゝの如く

まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く
 まゝの如く

約ん

あつたふりかへりては

いふにやむらひに九條

とふにふりかへりては

七もやふりかへりては

いふにやむらひに九條

いふにやむらひに九條

いふにやむらひに九條

いふにやむらひに九條

流結者へ一紙可換

八十俵之口御託

あつたふりかへりては

いふにやむらひに九條

いふにやむらひに九條

いふにやむらひに九條

五十七

難の年俵

凡例

佛法傳

人ながら詞に化してゐる
物にまよひのまよひにまよひ
花にまよひのまよひにまよひ

あふちのまよひのまよひにまよひ
又あふちのまよひのまよひにまよひ

前よりまよひのまよひにまよひ
ゆゑにまよひのまよひにまよひ
ゆゑにまよひのまよひにまよひ
橋のまよひのまよひにまよひ

祇を^{まよひ}まよひのまよひにまよひ
かゝるまよひのまよひにまよひ
一歩のまよひのまよひにまよひ
まよひのまよひのまよひにまよひ
まよひのまよひのまよひにまよひ
まよひのまよひのまよひにまよひ
まよひのまよひのまよひにまよひ

まよひのまよひのまよひにまよひ
まよひのまよひのまよひにまよひ

まよひのまよひのまよひにまよひ

この本は、*the history of the Japanese*
in the East

東洋の歴史
古くは、*the history of the Japanese*
in the East
あつた。この本は、*the history of the Japanese*
in the East
この本の題名は、*the history of the Japanese*
in the East
交して

東洋の歴史

この本は、*the history of the Japanese*
in the East
あつた。この本は、*the history of the Japanese*
in the East

この本は、*the history of the Japanese*
in the East

五十九

東洋の歴史
体報を後男記

字の病

東洋の歴史

この本は、*the history of the Japanese*
in the East
字の病

二つにわかれしは
川のほとりなる花の香りにて

けしきもよき
あはれもよき
あはれもよき

落しの病

夕暮の光に
夕暮の光に

こころもよき
あはれもよき
あはれもよき
あはれもよき

あはれもよき
あはれもよき
あはれもよき
あはれもよき

あはれもよき
あはれもよき
あはれもよき
あはれもよき

あはれもよき
あはれもよき
あはれもよき
あはれもよき

Handwritten text in cursive script, likely a list or notes.

十一

用之部 雜記 而於此

Handwritten text in cursive script, continuing the notes or list.

Handwritten text in cursive script, continuing the notes or list.

今更に人の心持を帯びて心持を致し心持を入
けしは世用ふれあはしむ

連年可實字履字の心持を先實字の心持
あはれおぼしめし心持を致し心持を致し
心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し
心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し
心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し

心持を致し心持を致し

心持を致し心持を致し

心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し
心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し
心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し
心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し

心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し
心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し
心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し
心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し
心持を致し心持を致し心持を致し心持を致し

いふは師説と文一

け道の身の大におしては、自説の、
答てせんか、後か、いふ、
一、
出、
の、
つ、
又蓮の葉と花とを、

らるか、

朝、
ら、
と、
ら、
か、
し、
し、
を、
た

日折てふまじきまじき...
勢なき病みなりてまの如くあれは連歌なりとて
てすも用は二とす

或はてふまじき出葉...
てすも用は二とす
せぬの解ありん^{ニニニ}身候^{ニニニ}而^{ニニニ}別^{ニニニ}し^{ニニニ}け^{ニニニ}二^{ニニニ}子^{ニニニ}別^{ニニニ}
てすも用は二とす
病み^{ニニニ}て^{ニニニ}す^{ニニニ}も^{ニニニ}十^{ニニニ}重^{ニニニ}り^{ニニニ}化^{ニニニ}十^{ニニニ}惠^{ニニニ}美^{ニニニ}ま^{ニニニ}の^{ニニニ}及^{ニニニ}人^{ニニニ}の^{ニニニ}を^{ニニニ}け^{ニニニ}は^{ニニニ}ら^{ニニニ}る^{ニニニ}
し^{ニニニ}て^{ニニニ}は^{ニニニ}い^{ニニニ}て^{ニニニ}深^{ニニニ}小^{ニニニ}鏡^{ニニニ}師^{ニニニ}の^{ニニニ}と^{ニニニ}て^{ニニニ}送^{ニニニ}望^{ニニニ}の^{ニニニ}徒^{ニニニ}願^{ニニニ}は^{ニニニ}す^{ニニニ}

あはれに念けたるをよけしる

六十一 余下巻終

以上乾坤

右而於則口傳杜丹祀老人のてまをこも傳抄とまま
し^{ニニニ}て^{ニニニ}言^{ニニニ}未^{ニニニ}秘^{ニニニ}抄^{ニニニ}の^{ニニニ}品^{ニニニ}一^{ニニニ}提^{ニニニ}共^{ニニニ}要^{ニニニ}故^{ニニニ}人^{ニニニ}は^{ニニニ}學^{ニニニ}の^{ニニニ}説^{ニニニ}約^{ニニニ}す^{ニニニ}
言^{ニニニ}う^{ニニニ}の^{ニニニ}際^{ニニニ}説^{ニニニ}如^{ニニニ}毎^{ニニニ}後^{ニニニ}と^{ニニニ}神^{ニニニ}と^{ニニニ}と^{ニニニ}下^{ニニニ}お^{ニニニ}う^{ニニニ}連^{ニニニ}寄^{ニニニ}提^{ニニニ}要^{ニニニ}
と^{ニニニ}名^{ニニニ}つ^{ニニニ}く^{ニニニ}偏^{ニニニ}子^{ニニニ}孫^{ニニニ}幼^{ニニニ}学^{ニニニ}の^{ニニニ}物^{ニニニ}と^{ニニニ}く^{ニニニ}せ^{ニニニ}り^{ニニニ}其^{ニニニ}の^{ニニニ}為^{ニニニ}ま^{ニニニ}り^{ニニニ}
と^{ニニニ}あ^{ニニニ}る^{ニニニ}て^{ニニニ}秘^{ニニニ}抄^{ニニニ}あ^{ニニニ}ら^{ニニニ}ね^{ニニニ}ら^{ニニニ}れ^{ニニニ}と^{ニニニ}同^{ニニニ}じ^{ニニニ}に^{ニニニ}念^{ニニニ}じ^{ニニニ}拾^{ニニニ}の^{ニニニ}の^{ニニニ}頁^{ニニニ}

今更なるを前より見ゆる如く
の如くはたかたかたる所は
さしつかへなく見ゆる如く
清きし書物にても見ゆる如く
さしつかへなく見ゆる如く

享保六年

法橋探庵

首夏下院

